

オレンジノートの 作成と試用について

慶應義塾大学医学部
精神神経科学教室
菊地 俊暁

背景と目的

- ◆ 緊急受診時の不十分な情報提供
 - ◆ 治療選択が限定されてしまう
 - ◆ 必要な対応がとられない→患者・家族・救急担当者・主治医のフラストレーション
- ◆ 事前の情報収集
 - ◆ 主治医
 - ◆ 患者
 - ◆ 家族からの情報提供 → 救急担当者へ

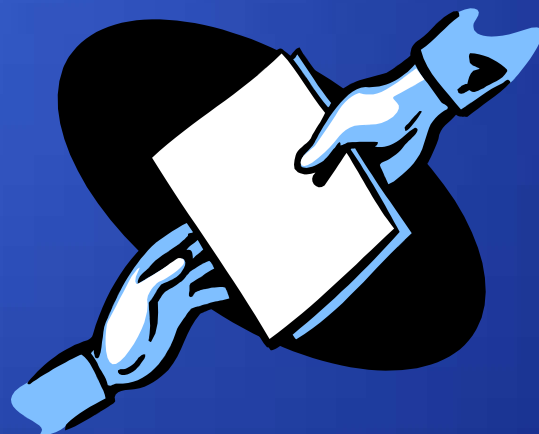
方法

- ◆ 期間
 - ◆ 2008年4月～2009年3月
- ◆ 対象
 - ◆ 医療機関を受診中である
 - ◆ 何らかの精神疾患を有する
- ◆ 方法
 - ◆ 1. 緊急受診用冊子(オレンジノート)の作成
 - ◆ 2. オレンジノートの配布
 - ◆ 3. アンケートの施行

研究手順



話し合いなどで
オレンジノートの作成



家族会や医療機関を通じて
オレンジノートの配布



患者や医師に対して
アンケートを施行

1. オレンジノートの作成

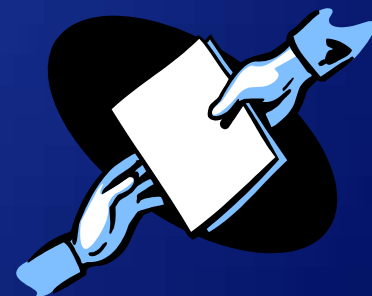


- ◆ 専門家の意見収集
 - ◆ 救急医療を担当する医師や医療関係者
 - ◆ 患者家族会の意見

- ◆ 冊子作成
 - ◆ 「急な診察に役立つ情報試作版東京都用」: オレンジノート
 - ◆ 内容
 - 主治医からの情報(病名・病歴・悪化時サイン・対処法など)
 - 患者・家族からの情報(救急担当者へ伝えたいことなど)
 - 救急医療連絡先(「ひまわり」や「いのちの電話」など)

2. オレンジノートの配布

- ◆ 配布
 - ◆ 協力を了承した診療所や病院、家族会などへ
 - ◆ 記入と緊急時の使用を依頼
- ◆ 結果
 - ◆ 約1600冊の配布
 - ◆ さらなる配布を求める連絡あり
 - ◆ 中には常備を求める声も
 - ◆ 他県からの反響あり

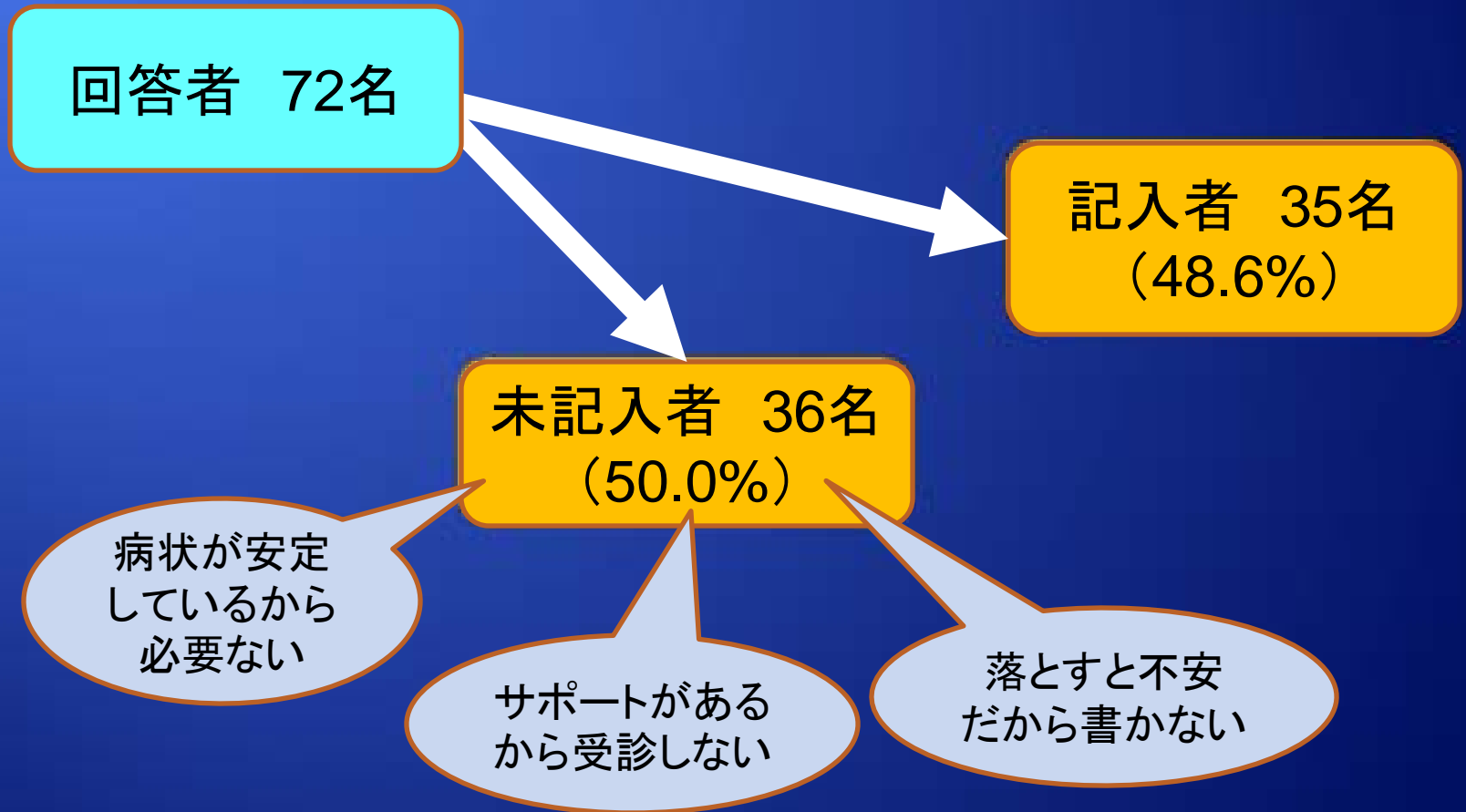


3. アンケートの施行



- ◆ 患者アンケート
 - ◆ 家族会を通じてアンケート用紙を配布し回収
→ 家族会に所属する患者が対象
 - ◆ 記入の有無、内容、使用の有無、利用価値など
- ◆ 医師アンケート
 - ◆ ノートを持参した患者からの依頼を受けた医師
 - ◆ 添付の葉書に回答し、返送
 - ◆ 内容、記入しやすさ、利用価値など

3-1. 患者アンケート



- ◆ 記入はしやすい(27名、77.1%)
 - ◆ 書きにくさを指摘する人は「昔のことで覚えていない」など
- ◆ 医師には頼みにくい(21名、60%)
 - ◆ 未依頼は「医師が忙しいので頼みづらい」
- ◆ 使用機会はなかった
 - ◆ 急な受診は2名 → しかし使用はせず
 - ◆ 42名(58.3%)は使用することがあれば便利
- ◆ 問題点
 - ◆ 情報更新の問題 「病状は変化するので役立たない」
 - ◆ 機能性の問題 「一目で分からない」「持ち運びが不便」
 - ◆ 情報提供の役割 「後ろに記載されている情報が役に立った」

3-2. 医師アンケート

- ◆ 43名の回答
- ◆ 書きにくい(35名、81.4%)
 - ◆ 「時間がかかる」との回答もあり
- ◆ 有用である(38名、88.4%)
 - ◆ 「患者が忘れる」「普及しない」という問題点の指摘もあり
- ◆ 工夫すべき点
 - ◆ 情報の更新
 - ◆ プリントやリーフレット、シート形式にするなど
 - ◆ 記載事項
 - ◆ 薬歴や英語表記、家族の連絡先、レイアウト、自立支援と同表記に
 - ◆ 患者の持参しやすさ
 - ◆ 診療報酬点数化の希望

まとめ

- ◆ 「急な診察に役立つ情報試作版東京都用」(オレンジノート)を作成した
- ◆ 実際の使用頻度は低い
 - ◆ 調査期間が短く、また安定した患者の多い家族会の配布が中心だったためか
- ◆ 患者と医師の双方が活用できると回答
 - ◆ 他県からの問い合わせや複数の医療施設から常備を要請された
- ◆ 患者から医師に記入を依頼しにくい
 - ◆ 医師側は記入が困難ではないと回答、しかし患者側は遠慮をしていた
 - ◆ 普及には、診療報酬化など患者が遠慮せずに依頼できることが必要かもしれない
- ◆ 情報更新や情報管理の安全性にはさらに工夫が必要
- ◆ 地域ごとに改訂されて活用されることも望まれる